

「救われたいと信仰をもつ」

それ以来、関係念慮で物を見る習慣、赤面や対人恐怖的な強迫観念が次第に身についてしまいました。しかし外見は、素直で真面目な優等生として、先生にもほめられ、両親も自慢の良い子でした。高校三年の受験期においてさえ、友人から、何の悩みもない幸せそうな人だと言われたりしました。そしてこれらのほめことばと「つねに悪意でみられているのではないか」という私の心配との余りの矛盾を、どう解釈してよいのかわからず、しかし気分的には、やはり、この人も私を心底から信頼してくれていないはずだと、寂しく思っていたものでした。主観と客観の違いなどには、まったく思いも至りませんでした。

大学に入ってから、クラブ活動の合宿等で共同生活をする必要があるのに、できるだけ避けられるものは避けていましたが、これでは社会に出てから困るという心配から、父が信仰しているある宗教の信仰を熱心にやり、いつかこれにより救われることを期待しておりました。

以後十五年余りも、心の平安を求めて間違った信仰のしかたをし、「私は強い」、「恐れない」というようなことばを自己暗示しては何とか不安のない強い自分に变えようとして、結果的にはとらわれを深めていたのでした。

神の存在を自然に自己の魂に植えつけてくれたことなどは、この期間の信仰のおかげではあり、感謝すべき点は多々あるのですが、観念的な傾向の強い神経質な私には、合わない宗教だったと思っています。

大学四年ごろには、私の神経質的な苦痛の訴えを心配して、父が森田療法関係の図書を買ってきてくれました。一時期、自分にぴったりのように感じて、つらいときには本を開いて勉強していたころもあり、この影響もあって昭和三十七年に就職してからも何とかつらいのを我慢して、社会生活をやってきました。昭和四十二年には、同じ信仰のかたの紹介で結婚し、四十三年には長男も生まれました。